

作文 1部

文部科学大臣賞

日本の「ハンズ」 「おそまつさま」

米沢市立北部小学校三年

青木 舞桂

「ごちそうさまでした。」

「おそまつさまでした。」

これはいつもの私たちのあいさつ。まるで合言葉のように、私が「ごちそうさま」というと必ずおばあちゃんは「おそまつさま」と言う。

そこで私はその意味を調べてみた。すると、「自分が料理をしてふるまったとき、その相手に『大した料理ではありませんが』というけんそんの気持ちを書いた言葉」と書いてあったので、私はおばあちゃんに「今日は大好きなドライカレーと五こく米だから、ごちそうだよ。」と言うと、おばあちゃんは「なるほどね。」と言ってにっこり笑った。

おいしいごはんのお礼に、私はいつも食べ終わった食

器やおなべ、炊飯器のおかまやしゃもじを一人であらう。たらいに水を張ってから洗剤を二、三滴たらし泡立て器でかきまぜる。泡のたらいの中で食器は気持ちよさそうにしている。手際よく食器を洗い終わると、おばあちゃんはいつも「上手だね。ありがとう。」とほめてくれるから、次の日私は一人でご飯とおみそ汁を作ることにした。

お米を水洗いするときには栄養をにがさないようにやさしく洗い、水の量は少し多めで、そのまましばらくお米に水を吸わせてから炊く。ご飯が炊き上がるまでの時間、今度はとうふとわかめのおみそ汁作り。だし汁を入れたなべを火にかけて材料を入れ、煮立たせてから火を止めてみそを溶き入れると、おみそ汁の出来上がり。炊き立てのご飯とおみそ汁を盛り付けて、おばあちゃんに食べてもらう。おばあちゃんは全部ぺろりと食べてから、「今まで食べたご飯の中で一番おいしかったよ。ごちそうさまでした。」と喜んでくれたので、私はけんそんして「おそまつさまでした。」と言った。私の心の中でさわやかなそよ風が吹いたようなそんな気がした。

作文 2部

農林水産大臣賞

庄内米は最高のお土産

庄内町立余目第三小学校六年

園部 杏莉

「お米がお土産なの？」この夏、東京で暮らす親せきのおじさんの家に遊びに行くことになった私が、母が準備したお土産を見て言った言葉です。「お米をもらつても喜ばないでしょ。もつといいお土産ないの。」と続けました。母は庄内のお米は自まんのできるおいしいお米で、どんな物より喜ばれるからと言って、東京に行く私より一足先にお米を東京に送りました。

初めての東京二人旅。飛行機に乗りながら東京で行きたいお店や町並みを想像して、心は躍っていました。ただ、お土産はもつとおしゃれな物にしてほしかったな、とずっと心に引かかっていました。空港に着くとおじさん夫婦が笑顔で迎えてくれました。一人で乗った飛行機の旅ということもあって、東京の家に着いた頃にはひどく疲れていましたがそんなときでもお腹は空いてきて夕食の時間となりました。「庄内米届いたよ。ありがとう。」おじさん、おばさんの言葉になぜか恥ずかしくなつて、「こんなものでごめんね。」と言いました。すると二人は「何よりのお土産だよ。山形は何でもうまいからな。杏莉は毎日おいしい物が食べられて幸せだなあ。」と話

しました。自然に囲まれて暮らすことの幸せ、東京には色々あるけれど、それは人が造りだした人工の物で見た目は華やかだけど、おじさんは自分の生まれ育った場所でもある庄内が誇りでもあり、庄内米はいくつになつても自分に欠かすことはできないと話してくれました。私は急に恥ずかしくなり、夕食に出されたお土産の庄内米を急いで口にしました。するといつもの味にほっと落ちつくのを感じました。そして庄内の風景が目には浮かび、東京に来て初日というのに帰りたい気持ちにもなつてしまいました。

翌日東京の街を歩きました。次々とくる電車。どこに行つても大勢の人。キラキラかわいいお店。話題の行列のできるスイーツ。どれも楽しくて新鮮で時間はあつという間に過ぎました。でも、大勢の人をかき分けながら歩く私の心には、なぜかずっと庄内の風景がうかんできます。鳥海山に種まきじいさんが現れる頃に田植えが始まり、夏には青々とした海のような田んぼにポツンとたたずむサギ。秋には黄金色の稲が風になびき、冬には田んぼに雪が降り積もる銀世界。元気がないときもお米を食べると不思議に元気が出る事。一粒のお米には七人の神様がいて、決して粗末にするなど小さな頃から教えてもらったこと。考えると私の日々の暮らしにはいつも田園風景があり、その地で多くの手間をかけて作られたお米で私の体が出きている事。

「山形には何もない。」という考えは間違っていました。庄内は私を育ててくれた大切な場所、すべてがあるとこです。誰からも喜ばれる庄内米を、私はこれからもお土産に選びたいと思います。

●山形県知事賞●

キコ、はじめてのおかゆ

南陽市立中川小学校二年

相田 瑛舞

「ママは今からキコのおかゆをつくるから、めんどうみてね。」

今日は、いつものキコがはじめておかゆをたべる日です。キコは、かみの毛がくるくるしてほっぺがプニプニしているかわいい赤ちゃんです。わたしは、いつもキコにミルクをあげていたので、

「えっ、ごはんたべられるの。」
と、とつてもびつくりしました。

ママがだいどころに行きました。わたしもキコをだっこして、ついて行きました。

ママがおかゆをつくりはじめると、なべからグツグツジュウジュウ音がして、あまいにおいがしてきました。「できたよ、すこしたべてごらん」

とママが、ちゃわんにもつてくれました。わたしは二口

たべてみました。

「あじがついてないのにこんなにあまいの。」

おかゆは口の中でとけて、おいしくてびつくりしました。ついに、キコがはじめておかゆをたべるときがやってきました。わたしは、たべてくれるかしんぱいでドキドキしました。

「たべられるかなあ。ああん。」

と言いながらママがスプーンでキコの口に入れました。キコは、わらつておててを口の中に入れてベトベトしながら、おいしそうにたべていました。

あれから、まい日キコは、おかゆをたべて体がぐんぐん大きくなりました。

「おかゆをたべられるようになったら、なんだか大きくなったね。」

とわたしが言ったら、ママが

「そうだね。おこめにはパワーがあるんだね。」
とわらつて言いました。

今はおかゆをたべているキコも、もうすこしたつと、いつしよにおにぎりをたべられるようになるんだろうなあ。たのしみだなあ。

●山形県農業協同組合中央会会長賞●

おこめは色じゃない

米沢市立北部小学校二年

田村 理音

「また、かたくてちゃ色のごはんかあ。」

「白いごはんがたべたいなあ。」

わたしは、げんまいがきらいでした。

わたしは、かぞくと「はなちゃんのみそしる」というえいを見ました。はなちゃんがかよっていたほいくえんでは、体にいいものだけをたべていました。なつとう、みそしる、げんまいでした。おとうさんがかりてきたおみその本にも、げんまいがいいと書いてあったそうです。それで、おうちでも、なつとうやみそしる、げんまいをできるだけたべることになりました。なつとうやみそしるはまえとおなじでおいしいです。だけど、げんまいだけは、どうしても大すきになれませんでした。げんまいは白いごはんとちがって、かたいし色

がちよつといやでした。わたしは、雪わか丸が二ばんすきです。ほかのおこめよりやわらかくてたべやすいし、においまでおいしいからです。おかあさんが、いまたべているおこめも雪わか丸だよと言ったのでびっくりしました。げんまいの雪わか丸が、白とおなじおこめとはちつとも思えませんでした。

五月に、田んぼアートの田うえにさんかしました。足にどろがくついてすすむのがたいへんでした。とちゅうで休みたくなつたけれど、下はどろだからおしりをつけなくてつかれました。でも、おおぜいの人がいっしょうけんめいさいごまであきらめないでうえていたので、わたしもがんばりました。そしたらすてきな絵の絵ができました。いっしょうけんめいうえてくれてありがとうという気もちになって、すききらいしないことにきめました。うえるだけではなくて、そだてたりしんぱいして見てくれたりする人、おこめをはこんでくれる人、うってくれる人、それぞれがいろいろなことにかつやくしてくれるからたべられるおこめ。白でもちゃ色でもかんけいなくおいしくたべようと思います。

●山形県知事賞●

ご飯と私の夏休み

米沢市立興讓小学校五年

安部くるみ

ピロリン、ピロリン。

この音を聞いて私は、真つ先にすい飯器の側にかける。というのは、お米をとぎ、セットするのが私の役わりなので、たき上がり具合がとても気になるからだ。

夏休みに入る数日前。

「くるみも授業で家庭科が始まったし、キャンプでご飯をたいたり、カレーを作ったりしたから今年の夏休みのお昼は、くるみにご飯をたいてもらって、ご飯係と一緒にして、お昼ご飯を作ってみようよ。」
と、母から言われたのがきっかけだ。私は、楽しみと不安が入りまじった気持ちでいっぱいだったが、とてもうれしかった。

いざ、夏休み。私のきんちようしながらお米をといでいるすがたを見て、母が米粒を一つもこぼさないように、ザルの上に台所用ネットをはつてくれ、そこからとぎ汁を捨てられるようにしてくれた。お米と私のことを思ってくれた母の気持ちがあたたかいなあと思つた。

すい飯器のスイッチを入れると、母と一緒に、その日のおかずやみそ汁を作り始める。けれど、毎回ご飯の出来ばえが気になって、ご飯がたける音、ご飯がたけるあまい香りがいつも以上に気になり、自分でたくとふだん気にとめない事も気になるものなんだなあ実感した。

そして、ご飯がたき上がり、白い湯気の中からふっくらとした、つやつやのご飯を確認すると安心する。二口味見をして、この家のご飯の味だと、さらに安心する。母と祖母は、いつもこんなにもときどきしたり、不安になったりするのだろうかと思つて聞いてみたら、「何十年もたっているから、くるみみたいにきんちようしないよ。くるみのすがたは新せんだなあ。」

と言われ、少しはずかしかった。

お昼すぎ、家族で私のたいたご飯で昼食をとる。母がご飯をたくと、みんな何も言わないけれど、私がついたご飯だと、

「いいんじゃない。固さも良いね。」

などの感想を言ってくれてうれしかった。中でも祖父母は、私のたいたご飯を誰よりも喜んでくれる。祖母と一緒にご飯を食べる時は、ご飯の水かげんを数ミリ多めにする。先日退院してきたばかりの祖父は、食よくが落ちたため、ご飯を少しやわらかくして祖父の好きなわかめおにぎりを、たまご位の小さな大きさにして二つにぎってあげる。すると、食べやすいのか、喜んで食べてくれる。

私は、この夏休みにおいしくご飯がたけるようになってきた。ご飯は、家族の健康と体調にやさしくよりそってくれる。私は、ご飯をたく時に味わたきんちよう感とうれしさを、いつまでも忘れずに、もつとおいしいご飯をたけるようになって、家族の笑顔が絶えないようにしていきたい。

●山形県農業協同組合中央会会長賞●

五月のおくり物

山形市立東小学校六年

宗形 柚希

五月の子供の日が来る頃、我が家には決まって届くものがある。それは、酒田に住む祖母がおくつてくれる「笹巻き」だ。その「笹巻き」はいつも祖母の手作りで、三角形の笹の中に米が入っていて、グルグル長い枝のようなもので巻いてあり、まるでふりこのような面白い形をしている。祖母が言うには、毎年の出来ばえは同じではないようだ。「今年はもち米を入れすぎて笹が破れた。」「今年は少し柔らかくなった。」「今年は少し小さくなった。」と話す。私には毎年決まって何一つ変わりはなく美味しい「笹巻き」で、届くとすぐに飛びつくものだ。私は、その「笹巻き」を笹から取り出し、青きな粉と砂糖を混ぜ合わせた、きな粉砂糖をまぶして食べる。母と弟は、黒みつをつ

と言われ、少しはずかしかった。

お昼すぎ、家族で私のたいたご飯で昼食をとる。母がご飯をたくと、みんな何も言わないけれど、私がついたご飯だと、

「いいんじゃない。固さも良いね。」

などの感想を言ってくれてうれしかった。中でも祖父母は、私のたいたご飯を誰よりも喜んでくれる。祖母と一緒にご飯を食べる時は、ご飯の水かげんを数ミリ多めにする。先日退院してきたばかりの祖父は、食よくが落ちたため、ご飯を少しやわらかくして祖父の好きなわかめおにぎりを、たまご位の小さな大きさにして二つにぎってあげる。すると、食べやすいのか、喜んで食べてくれる。

私は、この夏休みにおいしくご飯がたけるようになって。ご飯は、家族の健康と体調にやさしくよりそってくれる。私は、ご飯をたく時に味わたきんちよう感とうれしさを、いつまでも忘れずに、もつとおいしいご飯をたけるようになって、家族の笑顔が絶えないようにしていきたい。

●山形県農業協同組合中央会会長賞●

五月のおくり物

山形市立東小学校六年

宗形 柚希

五月の子供の日が来る頃、我が家には決まって届くものがある。それは、酒田に住む祖母がおくつてくれる「笹巻き」だ。その「笹巻き」はいつも祖母の手作りで、三角形の笹の中に米が入っていて、グルグル長い枝のようなもので巻いてあり、まるでふりこのような面白い形をしている。祖母が言うには、毎年の出来ばえは同じではないようだ。「今年はおもち米を入れすぎて笹が破れた。」「今年は少し柔らかくなった。」「今年は少し小さくなった。」と話す。私には毎年決まって何一つ変わりはなく美味しい「笹巻き」で、届くとすぐに飛びつくものだ。私は、その「笹巻き」を笹から取り出し、青きな粉と砂糖を混ぜ合わせた、きな粉砂糖をまぶして食べる。母と弟は、黒みつをつ

け、それにきな粉砂糖をまぶして食べる。このように、食べ方は色々だが、家族みんなが、祖母の作る「笹巻き」が大好きだ。毎年送ってきってくれる「笹巻き」。私はもう十一歳、幼い頃からずっとこの時期に食べてきたのだ。

私は、最近になって、なぜ五月のこの時期に「笹巻き」なのかと疑問に思い、調べてみた。すると「笹巻き」は、昔から五月五日の子どもの節句に子供の成長を願って、また旅立ちに無病息災を祈って作った食べ物だということを知ったのだ。そしてその時、私達の成長や無病息災を願って作り、送ってくれる祖母の温かい気持ちに気づかされた。私は、急に遠く離れている祖母の顔が見たくなり、声が聞きたくなった。私は、電話で祖母にどうやって「笹巻き」を作るのかを聞いてみた。笹の葉は下処理をして中に入れるもち米は、普通のお米を研ぐ時と同じだけれど、水に浸す時間を長めにすること、笹を三角に折ってその中へもち米を入れて巻き、鍋でゆでると話してくれた。母も今の私のように幼い頃から「笹巻き」を食べてきたそ

うだ。その「笹巻き」は、私が生まれる前に亡くなってしまった私の曾祖母にあたる、みどりおばあちゃんが作ったもの。私の母も今の私のように祖母の作る「笹巻き」を食べてきたことに驚いた。そして歴史や伝統を知り、嬉しく思った。私の母はまだ「笹巻き」を作ることができない。しかし、毎年送られてくる頃、「そのうちおばあちゃんに笹巻きの作り方を教えてもらわない」と、私に話す。曾祖母から祖母へ、祖母から私の母へ、そして私が大きくなって、家族や孫へ笹巻きの食リレーをつないでいくのかと思うと、とても楽しみだ。絶やすことなく、これからも引き継いでいきたい祖母の「笹巻き」…。美味しい五月のおくりものだ。

これからもずっとずっと食べていきたい。大好きな祖母の「笹巻き」。

●山形県知事賞●

丁寧なご飯

鶴岡市立鶴岡第三中学校一年

丸谷 真嬉

私の家には炊飯器がありません。だから私は、ご飯は鍋で炊くのが普通だと思っていました。鍋では予約ができないので、お母さんが仕事で忙しい時は私がご飯を炊いています。

「丁寧にといでね。丁寧に水加減してね。丁寧に時間を計ってね。」

お母さんの「丁寧に」という言葉は、私には面倒に聞こえました。

「いいじゃん。べつに、丁寧じゃなくても。」

と私が言うのと、

「上手にできなくてもいいから、丁寧さは忘れないで。」
と言われて、ますます面倒になってしまいました。

それに、小学校の調理実習で初めて炊飯器を使ってか

らは、鍋で炊くのは時代遅れだと思いました。だから家に帰って

「うちでも炊飯器を買おうよ。」

と、お母さんに言いましたが、

「鍋の方が丁寧だから良いの。」

と言って買ってくれませんでした。

今年の夏休み、私は六泊七日のキャンプに行きました。鶴岡市の金峰少年自然の家から遊佐町の海浜自然の家まで、金峰山に登ったり、川をカヌーで下ったりしながら六十キロを歩きました。夜は外にテントを張って、食事も自分たちで作りました。一日目はキャンプ場に泊まったので鍋でご飯を炊きました。

「おいしく炊けて班の六人が喜んでくれるといいな。」

そう思いながら炊くと、お米をとぐ時も、水加減も火加減も「丁寧に。丁寧に。」と、心の中で言っていました。

あんなに面倒くさかった「丁寧」が、自然

にできていることにおどろきました。そうしてできたご飯は、私が炊いたご飯の中で一番おいしくできました。

班のみんなも、

「おいしい。」

と喜んでくれて、私も嬉しくなりました。二日目は炊事場所がなかったのでパックのご飯をお湯で温めて食べました。パックのご飯は温めるだけで食べられるのでとても便利でした。でも、できたご飯を食べてみると味も香りも鍋で炊いたご飯とは全く別でした。私の班には小学四年生で体も小さい潤ちゃんと言う女の子がいました。潤ちゃんはパックのご飯はあまり食べませんでした。鍋で炊いてあげたいな。と思いました。その後も麺類やパン、パックのご飯が続いて、最後六日目の夜は海浜自然の家で調理ができました。ご飯だけではなく、他の料理を作る時も「丁寧」と、心の中で言いながら作ると、自然に班のみんなが喜ぶ顔がうかんできて、私も嬉しくなりました。そして丁寧に作った料理はやっぱり、みんながおいしく食べてくれました。あんなに面倒だった丁寧なご飯でこんなに楽しい気持ちになることにびっくりしました。

家に帰ってきて、私は辞書で「丁寧」を調べてみました。

「注意深く念入りであること。動物や言葉遣いが、礼儀正しく、心がこもっている。」

そうか。と思いました。丁寧というのは、心がこもっていることをいうのだとわかりました。丁寧にするということは相手のことを思いながらすること。だから、丁寧なご飯は心がこもっていておいしかったのだと思います。お母さんはご飯を炊く時、少し柔らかく炊いたり、おこげを作ったり、野菜や雑穀を混ぜて炊いたり、その時の家族の体調を考えて炊いています。火加減や時間を少し変えたりしながら、丁寧に炊いています。だからお母さんは炊飯器ではなく鍋でご飯を炊きたいのだとわかりました。炊飯器も、パックのご飯もとても便利です。でも、いつも便利なことばかりでは丁寧な気持ちを忘れてしまいます。丁寧なご飯は心がこもったご飯。丁寧は相手も自分も幸せな気持ちにしてくれる。私たちの暮らしはどんどん便利になりますが、丁寧さは忘れないようにしたいです。

●山形県農業協同組合中央会会長賞●

日本一の米つや姫

川西町立川西中学校三年

小林 柊也

「いただきます。」

僕は、そう言つてふくらと炊き上がったごはんを毎日おいしそうに頬張りながら食べる。このごはんこそが僕の力の源です。

僕のじいちゃんは農業をされていて、つや姫やコシヒカリなどたくさんのお米を育てています。僕はその中でもじいちゃんが育てた、山形県産つや姫が特に大好きです。その理由は、甘みやうまさも他の米とちがうからです。

僕は幼い頃からつや姫を食べて育ちました。小学校からは野球を始めて食べる量が少し増えました。ここぞという大事な大会や試合の日には、ごはんをしっかり食べてかけることで、力になりヒットやホームラ

ンを打てるようになりました。また、「ごはんをたくさん食べてきたから大丈夫！」と、自信を持たせるような役目も、果たすようになりました。中学生になつて、運動量がさらに増え、食べる量もすごく多くなりました。中学校入学当時は、細くてこのままでは試合では打ったりすることはできないと思い、体をつくるためにも一番はごはんを食べました。中学では投手を任せられるようになり、バッターでは四番としてチームを引っ張る役になりました。そのため、試合の合間に栄養を補給するための補食としておにぎりを食べました。食べることで、力が出て三振を取ったり、ホームランを打つことができました。最後の大会では、つや姫を食べたおかげで、一回戦を勝ち準決勝では、いつもコールドゲームで負けている相手に勝てませんでした。一点差とすごくいい試合ができました。お米を食べることで体も大きくなり、県選抜選手にも選ばれました。県選抜でも活躍することができ、もっとお米をいっぱい食べようと思いました。部活を引退し、受験としっかり向き合うように

なった今、やっぱりテストのある朝はしつかりごはんを食べていくと安心して、テストに臨むことが出来ます。

このように、私が生まれてからここまで大きくなる過程には、ごはんは身体にも心にも大きな良い影響を与えていたのだなあと今、改めて気づきました。改めて考えることをしない限り、私にとってごはんは当たり前前の日々に当たり前にあるものだったのです。

次なるステージの高校では、野球を続けたいと思っています。部活を引退しましたが、ごはんの量はもっと増やし、一年生ではベンチに入り、三年生の時には、甲子園に出場し、お米を汗を流しながら、どの季節のどの作業にも稲を守り育て、それを食べさせてくれる、じいちゃんや家族に感謝の気持ちを伝えられるようにしたいです。また、プロに入り、この山形のおつや姫のおいしさを全国に伝えることができればいいなと思っています。そして、もつとつや姫が全国的に有名になるようにしたいと思っています。そのため、お米を力や自信に変え、これからも頑張っていきたいです。

僕のごはんへの熱い思いはそう簡単に変わることはありません。ごはんを食べると日本人でよかったと思います。これからも、自分を成長させてくれたごはんの一粒一粒に感謝の気持ちを持ちつつ大切に、残さず食べていきます。